

# ベニスの展示と柿の木プロジェクトについての考察

有本唯

先日と前回、ベニスについての会議に出させていただいた有本です。

前回の会議も今回も、実行委員のみなさんの柿の木プロジェクトに対する熱意に驚きます。みんな自分の仕事もあるだろうに、プロジェクトのためにこんなに時間を割いている。何がみんなをそうまでさせるのか???その不思議さに、帰りの車中では頭が「？」のマークでいっぱいでした。

私は宮島達男事務所で仕事をしており、柿の木プロジェクトの資料も私が整理しています。ですから私は「柿の木に興味をもって、自分から主体的に参加した」というわけではありません。

おそらく多くの実行委員は、植樹やアートイベントを運営したり立ち会ったりして、現場で何か感ずるものを抱いたことで実行委員会に参加するようになり、今もがんばっているのだろうと想像します。しかし私自身の柿の木体験は、記録された写真やドキュメント、VTRなどの類を整理したことにあり、現場が原点ではありません。

私は柿の木プロジェクトのことを(多分)誰よりも知っていますが、それでも実行委員会には成り行き上、なんとなく「自分も実行委員なのだろうな」という感じで参加しているような気がします。しかし、だからこそ今、少し引いた位置から客観的な意見が出せるのではないかと思い、これを書きます。

## その1 柿の木プロジェクトと実行委員

今回、柿の木プロジェクト(以下、柿プロ)がベニス・ビエンナーレに出ることになり、先日の会議でそのことについて話し合いました。その時、私は色々と思うことがありました。一つは、柿プロが、5年後、10年後、そして最終的にどういう風になっていくのだろうか。その目的は何だろうか、ということです。

たとえば、10年後の姿として「世界100ヶ国に植樹して、日本からも世界からもいろいろな人々に認められ、喜んでいる」。単純に私は、そんな状態を想定してしまうのですが、その時、柿プロの色々な状況が変わっていたとしても、変わってはいけないものは何か。ということです。

ベニス・ビエンナーレは、現代アート界のオリンピックだといわれます。アーティストと呼ばれる人々が「今年の主演は私だ!」という気合いの下に参加し、そこで結果が出た若手作家は世界的なアーティストと認知され、一躍、ひのき舞台に躍り出たりするわけです。

そのような環境の中で柿プロは、たとえ他のアーティストやアート業界の人に馬鹿にされたとしても、相対的・競争可能な質ではなく、「絶対的な質、つまり個人個人のアートの原点に訴えかけるというスタンスで参加していくのだ」ということを、前回の会議で確認しました。このスタンスは大事だと、私は思っています。

アーティストとは本来、相対的にも絶対的にも、「質」を追い求めるものです。つまり、「絶対的な質に(も)重点をおく」ということは自明であり、アートでご飯を食べているアーティストとしては、そのステイトメントだけではお話になりません。つまりそんなことを言っているのけられるのは、職業アーティストではない者だけです。

既に多くの人が、あちらこちらの柿プロの現場で、アートなるものが出現したことを確認しています。その仕掛人は、職業アーティストではない実行委員の人々です。

プロのアーティストでなくても世界にアートを発信することはできる。逆にいえば、アーティストという枠にはまらない普通の人々だからこそ、創出できるアートがあり、絶対的な質を見つめ続けることができる。

どうも、柿プロのアートの秘密は、昨日まではアートを見にくるお客さんだった人が、次々と実行委員になって今のプロジェクトを動かす、変えているところにあるのではないかと思います。この仕組みは現在も進行中で、日々実行委員は増え、これに伴って実行委員会も日々変化し続けています。実行委員が1人増えれば、その分柿プロの表現も変化し、広がっていきます。この仕組みは、10年先も変わらないし、変わってはいけない部分なのだと思います。

## その2 柿の木プロジェクトとアート（1）植樹と一緒に行われるアートイベント

前章で「柿の木プロジェクトがアートを出現させている」と言いましたが、実はこの実態についても、私はぼんやりとした疑問を持っていました。「いったいどのへんがアートなの?」という点です。

柿プロの活動の基本は、「植樹+アートイベント」ということになります。

私は、過去の植樹やイベントのVTRや写真を全て見ました（それが私の仕事です）。見ているうちに、「そこに“アートの力による何か”が写っていること」はよくわかってきました。が、一方で「これが柿プロの“アートの力”なんだよ」ということは、うまく示せていない気もしました（これは私が、現場で実感していないせいかもしれません）。

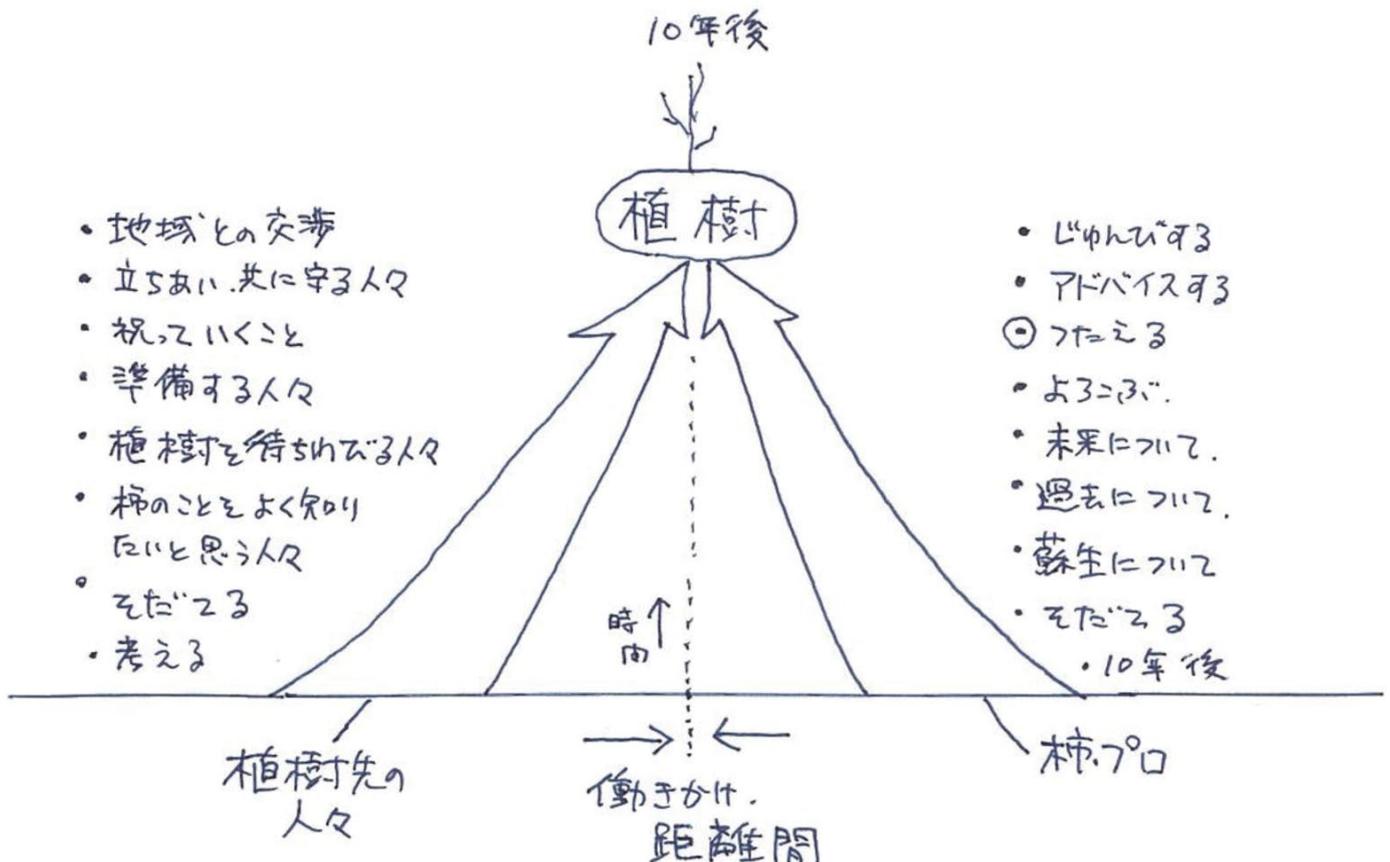
共通項として言えるのは、植樹先の、木を守っていく人たちとの共同作業の中で、何かが生まれているなあ、という感じです。ここはアートの力を感じる部分です。

植樹地の何箇所かでは、アーティストが直接関わって、アクションやワークショップ、創作劇などのイベントを実施してくれました。が、あくまでもイベントはメインではなく、植樹を盛りあげる「お祝い」としてのパフォーマンスに徹しています。やはり、個々の表現ではなく、植樹というプロジェクト全体がアートなのだといえます。

という風に考えてみると、柿プロが生み出すアートの1つの形として『植樹先の人々との共同作業が作るもの』ということがあるといえます。

植樹地の人々は、柿の木から「アートなるものを引き出す鍵」を持っている。一方、実行委員は、柿プロのコンセプトを提示するが、やり方を押し付けることはしない。だから、そこから生まれてくるのは、ジャズセッションのような、どんな風に発展するかわからないものなのだと思います。だから、柿プロは、色々な植樹先で、それぞれ違うアートを出現させているのではないのでしょうか。

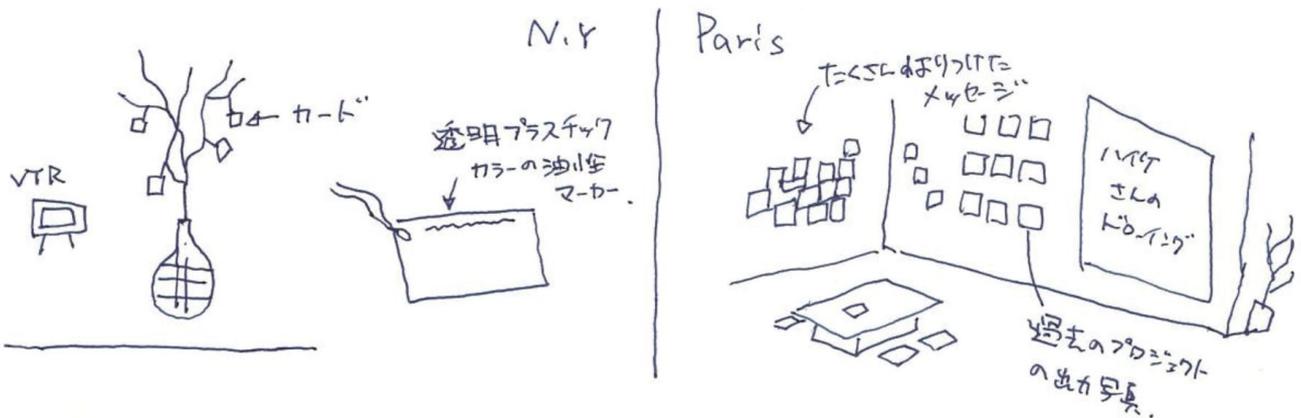
そして逆にいえば柿プロは、「植樹してくれる人がいなければ、アートが日の目を見ないプロジェクト」だとも考えられます。



## その2 柿の木プロジェクトとアート（2）植樹なしで行われるアートイベント

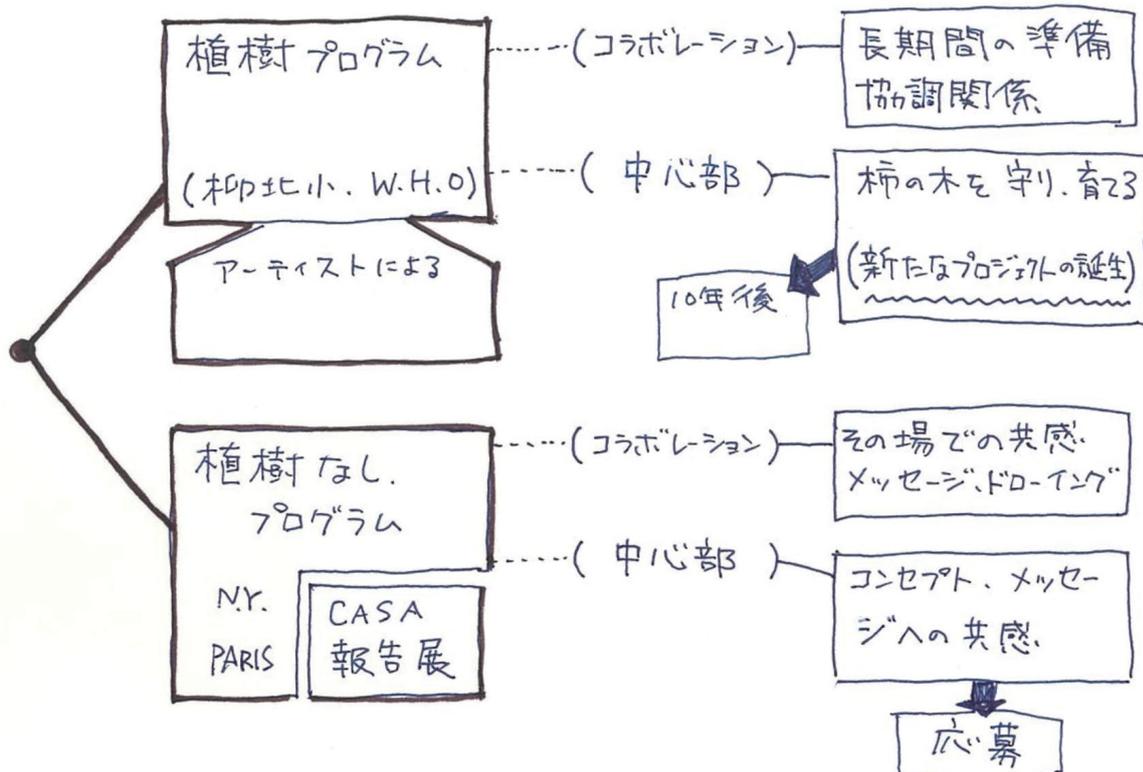
柿プロのアートプログラムのもう一つの形として「植樹なし」という形態があります。ニューヨークの国連本部ビルでの展示や、パリの「どないやねん」展が当てはまります。この2つの展示は、実行委員会が主体ではなく宮島達男がディレクションし、宮島が中心となって行ったものですので、柿プロメンバーには認知度が低いかもしれません。

NYではブロンズ鑄造した柿の木のオブジェを展示しました。見てくれた人に「平和についてのメッセージ、またはお母さんの顔を描いてください」とお願いして書いてもらったカードを、オブジェの枝にぶらさげるといった参加型のアクションを行い、好評でした。この展示はサンパウロにも行きました。



パリの「どないやねん」展では、NYと同じように観客に絵を描いてもらい、それを壁に貼り付けるというアクションを行いました。やはり、たくさんのおもたちや大人たちが描いてくれました。

この2つの展示は、CASAで行った「柿の木プロジェクト報告展」に、見に来た人の参加・アクションをプラスした形といえます。どちらも柿の木の「里親募集」に主眼を置いた展示でしたので、植樹が主となるコラボレーションアートとは性質の違う表現として考えるべきかと思います。



これまでの活動を振り返ると、(1) 植樹と一緒に行われる、植樹地との共同作業としてのプログラム と(2) 植樹地以外で実施する、「プロジェクトのイントロダクションの役割を果たし、里親募集を呼びかける展示」(このバリエーションとして、レクチャーやバザーも実施してきました) の2種類があることがわかります。そして、たとえば「植樹なしのプログラム」であっても、観客参加のメッセージやドローイングには表現としての説得力があり、アートワークとして成立していたことも確認できます。つまり、単に一方通行的に柿プロを紹介しただけではなく、その場で観客の共感が醸成されていた、ということです。

つまり今後も、植樹と一緒に行われない展示・表現にも、柿プロのアートを出現させる可能性があるのかもしれない。

### その3 ベニス・ビエンナーレの柿の木プロジェクト

#### ① 参加型であること

本題に入る前に、余談になりますが、ストラスブールの美術学校の植樹の話をしてします。もちろん私は現地に行っていないので、記録写真からの推測です。

ストラスブールの植樹では、アーティストによるワークショップではなく、参加者によるドローイングやアクションがあった訳でもないようです。参加者が、身の丈ほどもあるような長いスコップを使って楽しそうに土をかけている姿が、写真に写っていました。

おそらく当日のイベントは、式典と植樹だけだったのですが、写真に写っている人たちの表情から、そこにアートの「場」があったことが想像できました。苗木に土をかける行為がアートワークになっていたことを感じました。

なぜ土をかけて、苗木を植えることがアートになるのか？

それはやはり、スコップを手に行っている人が、そこに植ええられる苗木が何であるかを理解していたからでしょう。苗木の意味を理解して植樹の日を楽しみに待っていてくれたからこそ、そこにアートの場が醸成され、アートが出現していたのだと想像します。

さて、ベニス・ビエンナーレのプロジェクトをイメージしていくと、「植樹なしプログラム」の法則に従い、展示の目的は「共感の輪を広げていく」という方向にあると思われます。

同じく、今までの法則に従うとすれば、「表現として説得力があり、その場でアートワークとして成立するクオリティ(質)」も求められると思います。

一方、表現する内容については未確定ですが、目的に即した形で展開するものなので、これから少しずつ明確にしていけばいいのではないかと思います。

絶対に外せないポイントは、「参加型」ということだと思います。

観客が自分の感じたことを表現する場所を設定することは必須であり、プロジェクトの一部でありながら、ここがプロジェクト全体の雰囲気左右する可能性があります。ですから、このアクション・プランは、具体的なアイデアとして、しっかり詰めていく必要があると思います。

但し、柿プロを柿プロたらしめている本質は、「参加者(ここでは観客)の自由意志にまかせること」なので、そこで出来上がるもののクオリティについて神経質になる必要はなく、「見る人・参加する人におまかせする」ので大丈夫。参加者が勝手に、表現の質を $+\alpha$ していってくれることと予測します。

だから、アクション・プランは、参加者の行動や思考を制約しないものであってほしいですね。それから、参加者の心情を試すようなものであってほしくはないと思います。あくまでも「参加型である」けれども、「体験型ではない」というイメージです。

アクション・プランは、柿プロの意味についての理解を広げ、展示をより豊かにすることを目的として、ある程度、効果の予測を立てておくべきかもしれません。

観客参加型のバリエーションとして、会場にいる他のアーティストや、現地の人々によるパフォーマンスやワークショップを実施することも、可能性としては考えられます。但しこれは、具体的なイメージや、アイデアを持っている人がいるかどうか依ると思います。小さな呼びかけに賛同してくれる人が現地にいれば、それはすごいことだし、新たなアートの力を再発見できると思いますが、一方で、実現させるためには、実行委員が現地に居てプランを補佐する必要も出てきます。ですから、具体的なアイデアを持っている人のプランを検討して、必要かどうかを決めていくべきかと考えます。私自身は、観客参加型のアクション・プランがいいと思っています。

## ② 表現の質（クオリティ）について

展示表現の質について考えます。柿プロは職業アーティストの集団ではないので、ここは心配なところかもしれません。でも僕の考えでは、ベニス・ビエンナーレの形態は、柿プロに有利に働いているような気がします（もちろん想像の域を出ません、だって1度も見に行っただけのことだから）。

一つには、国ごとに展示館が独立していて、各館の特性が保たれている点です。

普通のグループ・ショーは、大きな建物を部屋で区切ったり、順路が決まっていたりしていることが多く、個々の展示は、ショー全体のコンセプトや空間的な順番に左右されがちです。

しかし、今回の展示空間では、日本館の地下部分のワンフロア全てを使えます。壁を立てつけば、独立した空間が確保されます。壁や天井を白く塗ってもらってカーペットを敷けば、キューブとしての剛性は強く、外界から隔離された世界観を創りだせるのではないかと思います。

また地下スペースなので、土、地面に近く、柿の木の苗木にリンクする感じがします。もしかしたら、床はでこぼこかもしれません。

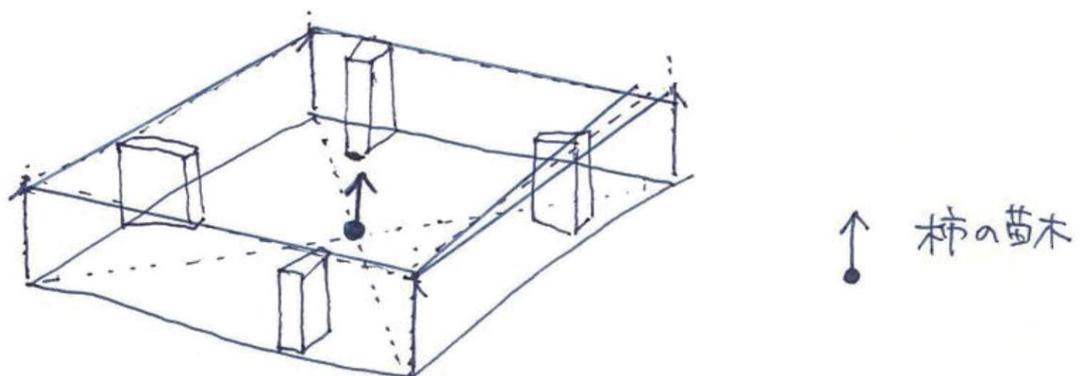
入口・出口が近いこともメリットだと思います。周りの植栽の状態が良ければ、外に出てからも、一本の木に込められたイメージを保持してもらうこともできるんじゃないか？と思います（が、これは演出過剰でしょうかね…）。

二つ目に柿プロの世界観に有利な点、それは「柿の苗木がそこにある」ということです。

被爆2世の苗木は、柿の木プロジェクトの「核（コア）」です。この苗木のように正々堂々と「表現の中心、プロジェクトの中心核（コア）」が存在している作品は、他の展示館にはそうそう作れないのではないかと思います。

日本館の建物を平面図でみると正方形で、柱構造も風車形に配置されていることから、空間の成り立ちが、床平面の中心点を意識させます。

この位置に柿の苗木を置くことは、空間の剛性のためにも重要なポイントだと思いますので、私はこの点を提案します。



---

では、柿プロの世界観をこの空間のすみずみまで行きわたらせるということは、どうやったら実現できるのか？

そもそも、「柿プロの世界観」とは何か？

それはたぶん、実行委員一人ひとりにとっての「柿の木の世界観」なんじゃないかと思います。今ある一人ひとりの世界観を、慎重に、ねばり強く、提示していけばいいのだと思います。現状のそれぞれの頭脳と心で、出来ることを、やりたい方向で提示していく、ということでしょう。多少のハツタリとカッコツケも目的に即していればOKかと思いますが、展示の効果を最大限に引き出すためには、正直さでやるほかないと思う。

私の考える展示の目的は、「誇張のない、ニュートラルな柿プロの印象を、見た人に残すこと」です。この目的が一番大切だと、私は考えます。

以上、長くなりましたが、話し合いの叩き台になるかと思い提出します。賛成の反対なのだ！

\*本稿は、1999年2月13日に開催された「柿の木プロジェクト実行委員会（議題：ベニスビエンナーレにおける柿の木プロジェクト）」での討議を経て、次回委員会への提案資料として2月22日に執筆され、柿の木プロジェクト実行委員会へ提出された文章を、2024年に加筆・修正したものである。

● ありもとただし

1968年東京生まれ。1998年 東京藝術大学大学院美術研究科修了。1998年より有限会社宮島達男事務所に勤務し、以来長年にわたり「時の蘇生・柿の木プロジェクト」に携わる。